

令和3年度
横山利弘先生を囲む道徳教育東京勉強会（報告）

多摩市立聖ヶ丘中学校長
麻生隆久

第1回勉強会 5月16日（日）参加者27人（ズームと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物資料「ブランコ乗りとピエロ」（文部科学省「私たちの道徳 小学校5・6年」）を活用した深い学びのある授業づくり

【進め方】（第2回以降も同様）

- ① 全体会（参加者自己紹介、道徳教育に関わる質問等と横山先生による解説）
- ② グループに分かれた資料検討。
- ③ 全体協議会（グループ討議の報告と横山先生による指導・助言他）

【全体会及び協議会より】

○道徳科の指導について（より良い道徳の指導のために抑えておきたいこと）

→道徳的判断力と道徳的实践意欲の違いについて、道徳的判断とは、道徳に関する知的な働きであり、その土台となる力が道徳的判断力である。一方、道徳的实践意欲は心情的な働きをさし、個人の中にとどまっている力が、行動として外に出ようとする力のことと考えることができる。また、道徳科の指導で大事にしなければならないことは、「自分の生き方」を考えることである。それは、処世術ではなく、人としてより良く生きるとはどういうことかを考えることであり、そのためには生きることにつながるような発問を考えることが大切である。

○「ブランコ乗りとピエロ」で考える視点

→この教材の内容項目は、「相互理解」であるので、2人は何を理解し合ったのかを考えさせたい。その際、中学生なら、立場や役割の違いにも目を向け、そもそも人が人を理解するとはどういうことか、何がどうなれば人を理解したことになるのかという視点で発問も考えたい。そのために、まず、他者のことをよく知ることが必要だが、それは、情報としての「知」だけでなく、相手の心の中の動きにも着目させることが大切である。深い学びとは、人間性に達する学びであり、その上で、自分の生き方をどうするかまで考えさせたい。

第2回勉強会 7月17日（土）参加者27人（ズームと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物資料「背番号10」（文部科学省「中学校道徳 読み物資料集」）を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○道徳科の指導について

→道徳科の授業のねらいを設定する際、解説書をもとに考えることになるが、小学校では発達段階や子供の諸価値の理解の状況によっては、上の学年の内容を取り入れることもある。大切なことは、目の前にいる子供を中心に考えていくことである。特に、中学校は一つの内容項目で3年間が同じなので、実際の発問を考える際に、生徒の実態をふまえ、道徳的価値に対する理解がより深まるようにしたい。そのためには、対話を通じて生徒の感性を引き出し、生徒が

どう理解しているのか、生徒自身の言葉で表現させることが大切である。

○「背番号10」を考える視点

→これは、富山県のある学校の実際のできごとをもとにして作られた「感謝」に関する資料である。その際、主人公は、何について感謝しているのかということが中心になるが、あれもこれもと具体的な感謝の対象がたくさん出ることだけでは深まらない。大切なことは、頭を下げた主人公がどのような思いであったかということである。行為の奥にある情や意思の面に思いをはせるような授業にしたい。

第3回勉強会 9月18日(土)参加者20人(ズームによるオンライン勉強会)

【課題】 読み物資料「違うんだよ、健司」(文部科学省「中学校道徳 読み物資料集」)を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○道徳教育における各教科と道徳科の関係について

→各教科の学習内容や学習活動において道徳科の内容項目に関わる側面がある。しかし、教科の時間の中で、それを個別に取り上げて深く学習することはしない。そこで、教科や特別活動、行事などで学んだ道徳的な側面を道徳科の時間において補充・深化・統合する必要がある。

○道徳科の指導において、話し合いと書かせることの関係について。

→音声言語と文字言語の違いを意識する必要がある。最近の道徳の時間は、書かせることに終始しているような授業が増えている。音声言語は、人間関係づくりに大切であり、文字言語は、思考を整理し、結果を記録することに役立つ。しかし、書くことに追われると、もっと考えを出し合わなければならないときに対話ができないことにもなる。大切なことは、文字に書いても書き切れない思いを伝え合うことである。道徳科の時間は、この文字では表現しきれない部分を大切にしたい。

○「違うんだよ、健司」を考える視点

→今の子ども達は、表面的につきあっている場合が多い。しかし、物事に敏感で、傷ついている子も多い。できごとに深入りはせずに、その時の心には深入りが必要なこともある。大切なことは、知ろうとすることではなく、相手を気遣うことである。但し、この気遣いには2通りあり、気遣って聞いてくれる友もいれば、聞かずに、何をしてあげたらいいか考え、それを行動に移す友もいる。この時間では、お節介と親切の違いを考えさせることなどを通して、「何が違うのか」をしっかり考えさせ友情とはどうあるのが望ましいかを考えさせたい。

第4回勉強会 11月20日(土)参加者31人(ズームと対面によるハイブリット型勉強会)

【課題】 読み物資料「帰郷」(文部科学省「中学校道徳 読み物資料集」)を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○道徳科の授業と指導書の関係について

→教科化によって、教科書を主たる教材として、年35時間、22項目を必ず行うことにな

り、それまで道徳の時間をしっかりやっとなかった先生も、やらざるを得ないことになった。そのため、教科書会社の作った指導書や赤刷りの展開例そのままの授業が行われていることが多い。しかし、指導書類は、あくまでも一つの参考例である。本来なら、教師一人一人が、資料をしっかり読んで、その資料にある道徳的な問題は何か、中心発問をどうするかなどを子供の実態に照らして考え、そこで主に取り上げる内容項目について、学習指導要領の解説を踏まえたうえで、授業づくりを考えていくことが大切である。

○ローテーション道徳について

→以前の道徳の時間の指導は、担任が1つの教材を1回だけ行うことが前提であったので、教材を使いこなせず、内容を深められないことも多かった。そこで、ローテーション道徳が取り入れられたが、中には、ただ単に、道徳の授業を手分けして行うことが目的となり、指導力を高めることに役立っていないことも見られる。本来は、同じ教材を複数のクラスで扱うことで、自分の授業を毎回振り返ることになり、教材を使いこなす力がつくようになることが期待されている。また、一つのクラスにいろいろな先生がかかわることで、生徒の様子を様々な角度からみとることになるので、より客観的な評価をすることにも役立つ方法である。

○「帰郷」を考える視点

→この資料には、いろいろな思いやりが込められている。それぞれの場面から人のさりげないやさしさに気付かせ、そこにどんな人のどんな思いがあるか、感じ取らせたい。その中で、主人公が、人から批判されても母のことを一番に考えたいという思いに気付かせたい。また、この資料を扱うにあたって、今の子供たちにとって、故郷に帰るということが、どのような意味を持っているのかも考えておきたい。現代は、地域社会とのつながりが薄くなりつつあるが、そこが自分の居場所だと思えることが大切であり、そこが「帰る」場所である。

第5回勉強会 令和4年1月15日（土）参加者27人（ズームと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物資料「仏の銀蔵」（文部科学省「中学校道徳 読み物資料集」）を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○道徳科の授業におけるICTの活用について

→ICTの活用というが、ICTを使うこと自体が目的化していることがないか。あくまでも、道徳的な問題を深く考えるためのツールとして用いるということを意識しておきたい。教材の場面や状況などで、今の子供には言葉だけでは理解しにくいようなものもあり、写真や動画、映像などを用いることで、教材を理解しやすくなることもある。また、教室内で、生徒がタブレットにばかり向かっていては、教師は発問について考えている生徒の表情を読み取れない。出た考えをもとに、どう深めるかが大切である。

○「仏の銀蔵」を考える視点

→遵法精神を学ぶ教材としてよく知られており、「お天道様」とは何かを問う授業が多い。しかし、それを突き詰めるより、証拠主義になりがちな規範意識をもつことの多い子供たちに、

たとえ証拠を消しても、事実は自分の中に残ることに気付かせ、自己の良心に従って判断することの意味を考えさせたい。

第6回勉強会 3月19日(土) 参加者29人(ズームと対面によるハイブリット型勉強会)

【課題】 読み物資料「花と水」(兵庫県教育委員会「道徳教育副読本読み物資料・小学校」)を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○道徳科の授業における現代的な課題や教材の効果的な取り扱いについて

→中学校では、ローテーション授業を行うことで、現代的な課題を取り扱う際などに、教科の専門性を生かした教材や話題を取り入れることによって、より効果的な授業を行えることがある。また、偉人を題材とした授業で気を付けたいことは、単に、その人物の行為や功績のすごさだけに着目するのではなく、その人物の思考の幅やすばらしさに着目した授業を行うことで、深まりのある授業にすることができる。

○「花と水」を考える視点

→これは、かつて全国花のコンクールで最優秀賞に輝いた幼稚園が、阪神淡路大震災時に避難所となり、手の入らなくなった花壇が、再びよみがえるまでの手記に基づいている。こうした資料を用いる場合、その人物が、数々の困難を克服して、人々の心を動かし、目的を成し遂げた行動の大変さを追っていく授業が多い。しかし、人々が生き伸びることに精一杯の状況の中で、どのような思いがあって水やりを始めたのかを考えさせたい。不安におびえる子供たちにとって、花にはどのような意味があるのか、また、それを見ていた周囲の大人たちにどんな思いがあってやり続けることができたのかも考えさせたい。道徳科の授業では、登場する人間とその人生も一緒に読み込もうとする姿勢が大切である。

<令和3年度の勉強会を振り返って>

令和3年度は、読み物資料の活用した深い学びのある授業づくりをテーマとして年間6回の勉強会を重ねてきた。道徳が教科化されて、小学校は3年、中学校も2年がたち、この間、多くの学校で道徳教育に関する研修会が開かれ、それに伴って、道徳科の目標も概ね定着し、授業づくりに取り組む際に、多面的・多角的に考えさせることや、自分事として考えさせることは、広く行われるようになった。また、特にこの1、2年は、コロナ禍にあって、GIGAスクール構想の実現も急がれ、全国的に全児童・生徒へのタブレット貸与が進んだ。それとともに、すべての授業でICTを活用することが求められ、道徳科にもそれが求められ、ホワイトボード代わりに使用する、一度に複数の生徒の考えを提示するなどの工夫が広がった。しかし、ICTを使うこと自体が目的化しているような場合もみられ、勉強会の中でも、深い学びにつながるようなICTの活用が今後の課題として挙げられた。

いずれにしても、道徳科の授業においては、道徳科の目標に迫ることが大切であり、そのためには、どうすれば深い学びになるのか、今後も勉強を重ねていきたい。